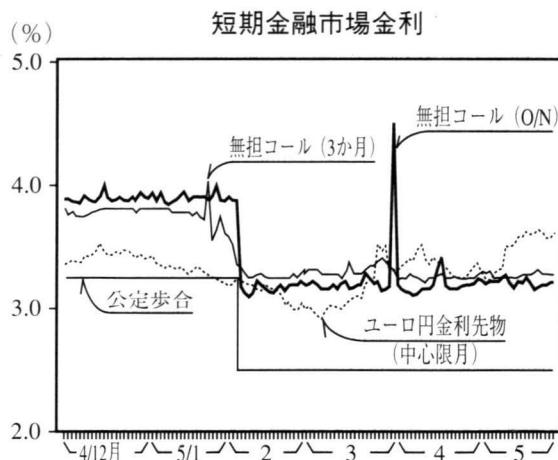


金 融 市 場 動 向 (平成5年5月)

1. 短期金融市場

5月中のオーバーナイト・レート（無担保コール）、ターム物レートは、それぞれ横ばい圏内で推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、月後半にかけて上昇した（なお、13日に限月交替＜中心限月：5年12月限→6年3月限＞）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は45兆2,212億円と、前月（45兆1,573億円）を若干上回った。



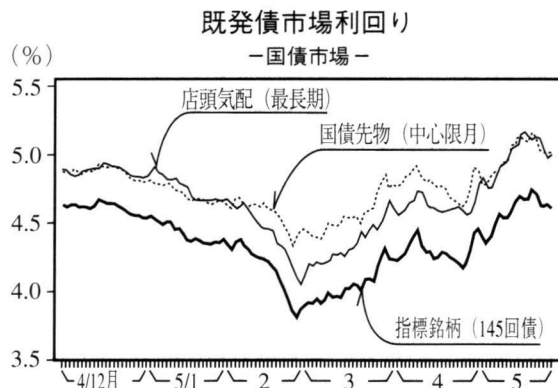
2. 資本市場

5月の国債利回り（145回債）は、中旬にかけて一部景気指標の好転を受けて金利先安感が後退するもとで上昇をみていたが、下旬には若干低下し4.575%（前月末4.400%）で越月した（国債先物中心限月4.944%＜前月末4.843%＞、なお、13日に限月交替＜中心限月：6月限→9月限＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を下回った一方、先物は前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、10日には21,054円と4年3月4日以来の21,000円台を回復したものの、その後若干弱含み、結局20,552円（前月末比△367円）で越月した。この間、株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）も、5.01億株と前月（6.62億株）を若干下回った。

起債動向をみると、長期国債（6月債、10年＜価格競争入札分＞）は、クーポン・レートが



前月債比0.4%ポイント引き上げられた（4.5%→4.9%）こと等から、概ね順調な入札となった（5月25日入札分：募入平均利回り4.891%、応募倍率4.29倍）。また、短期国債については、落ち着いた入札結果となった（5月17日入札分＜3か月もの＞：募入平均利回り3.168%、応募倍率2.15倍）。

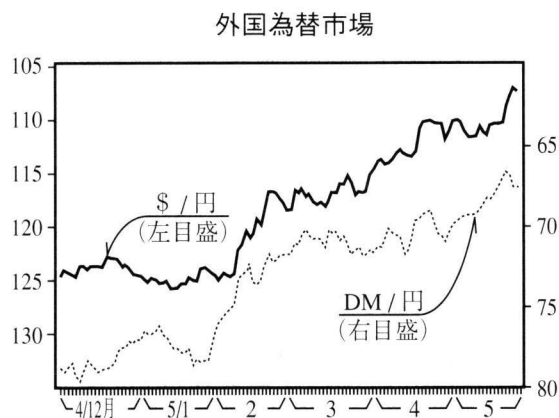
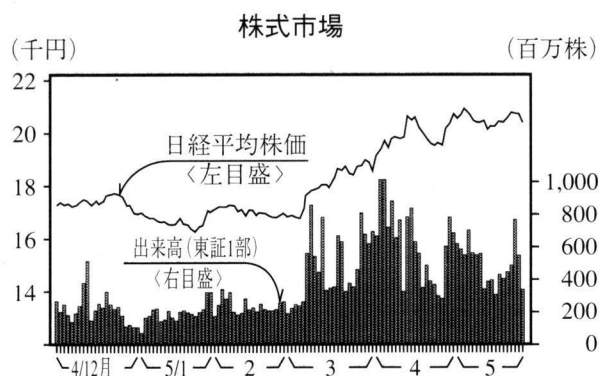
国内公募普通社債の発行は、低水準の前月を上回った（4月110億円→5月1,950億円）。

国内エクイティ市場での発行（5月払込み分、増資は除く）は、前月を下回った（4月1,975億円→5月370億円）。

3. 外国為替市場

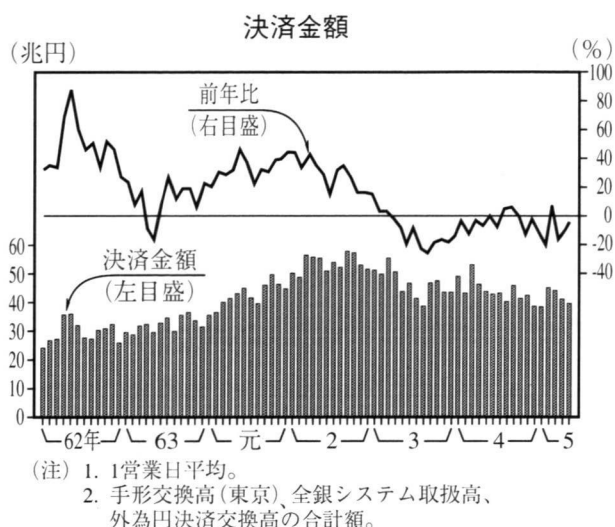
5月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、小動きの展開となった後、下旬入り後大幅に上昇、28日に107.38円と既往最高値を更新し、107.45円で越月した（前月末111.10円）。一方、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、26日には66.63円と既往最高値を更新するなど、月中を通じて上昇した後、67.51円で越月した（前月末70.09円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は150.9億ドルと、前月（171.3億ドル）を下回った。



4. 決 済

5月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、全銀システム取扱高、日本銀行当座預金受払額は前年同月を上回った（全銀システム：前年比+14.0%、日本銀行当座預金受払：同+15.5%）が、手形交換高（東京）、外為円決済交換高は、それぞれ前年同月を下回った（手形交換：前年比△5.3%、外為円決済：同△11.5%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）は、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+35.9%、振込口座振替：同+16.5%）。



5. 資金需給、金融調節

5月の資金需給をみると、銀行券要因が2兆2,630億円の余剰（前年同月1兆4,652億円の余剰）となったのに加え、財政等要因も、運用部や社会保障費等の支払いがかさんだことから、1兆8,769億円の余剰（前年同月3兆9,315億円の不足）となり、全体では4兆1,399億円の余剰（前年同月2兆4,663億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

6月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、公務員・民間ボーナス支払資金を中心に2兆3,000億円程度の不足（前年同月2兆1,492億円の不足）となる一方、財政等要因は、法人税を中心とする税揚げが見込まれるものの、交付金や国債償還等の支払いがかさむことから、6兆2,800億円程度の余剰（前年同月4兆1,475億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では3兆9,800億円程度の資金余剰（前年同月1兆9,983億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

4月のマネーサプライ統計をみると、M2+C D平残前年比伸び率は+0.6%と前月に比べ1.0%ポイント上昇した。これは、財政要因（運用部・公共事業費の支払増等）がマネー押し上げに働いたことによるもの。通貨種類別にみると、現金通貨、預金通貨の伸び率が上昇したほか、準通

貨の減少幅が縮小した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+2.5%と前月に比べ0.5%ポイント上昇した。

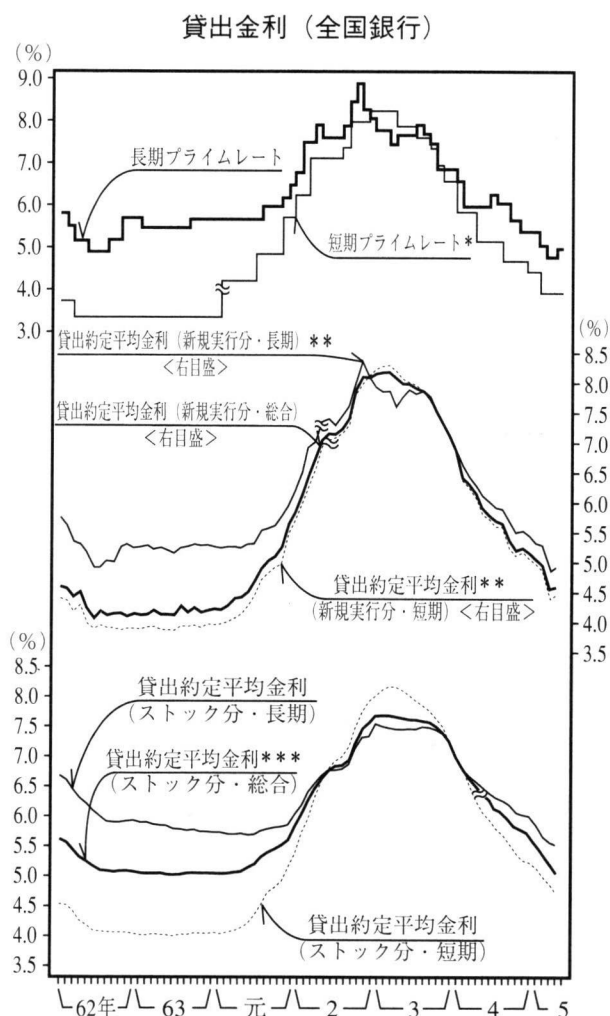
5月の銀行券平残前年比は+4.8%と前月を上回った。

5月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀II）は、前年比+0.9%と11か月ぶりにプラスに転じた。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀II）は、前年比+1.2%と前月とほぼ同じ低い伸びとなった。

7. 貸出・預金金利

4月中の新規実行分の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、短期、長期、総合とも横ばい圏内で推移した（短期：前月比+0.023%、長期：同+0.020%、総合：同+0.010%＜3月4.531%→4月4.541%＞）。また、ストック分（全国銀行）では、既往貸出分の金利改定が引き続き進捗したこと等から、短期、長期ともに前月比低下（短期：前月比△0.112%、長期：同△0.078%）し、長期は既往ボトムを更新した。なお、今回より当座貸越のストック分の約定平均金利（全国銀行）が4年4月にさかのぼって公表されたが、この当座貸越についても4月は前月比低下した（3月4.830%→4月4.737%、前月比△0.093%）。この結果、総合（当座貸越を含むベース）でも、前月比低下した（3月5.201%→4月5.117%）。

この間、4月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（3月2.979%→4月2.936%）。



(注) * 元年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 2年4月以降は地方銀行IIを含む。

*** 4年4月以降は当座貸越を含む。

（平成5年6月16日、調査統計局）